周圍に穿孔するの危險に脅かされるのである。

臨牀上前額竇炎の診斷は必しも容易なものでない。由來前額竇は解剖學的に左右兩竇の非對稱性なること多く、一側はこれを缺如せるに、他側には極めて大なる竇の存在することもある。またその大さも變動甚だしく、全く缺如せるもの或は極めて小なるものあり、または巨大にして上方遠く前額骨の半ば以上に達するものもある。されば前額竇にありてはレ線診斷は特別なる意義を有し、就中手術に際して唯一の指針を與ふるのである。

前額竇撮影には通常後頭顔面撮影法を用ひ、他の副鼻腔と共に明瞭に認められる、しかし竇が極めて小さくしかも岩樣骨が少しく上方に投影せらるゝ時は、この撮影像では見落さるゝことがある。かくの如き場合には後頭頤部撮影法を用ふべきである。また横位撮影法に據れば竇の深さ、高さ、竝びに前後骨壁の狀態等をも明にすることが出來る。

前額竇蓄膿症は左右兩竇の陰影濃度の差のみによつて診斷する時は過誤を來たす虞がある。陰影濃度の外に尙ほ著眼すべきことは輪廓骨壁の溷濁である。これも前額竇が一側に於て缺如する時は左右の比較が不可能になり從つて診斷は困難なのである。竇の前後骨壁が極めて厚い時にも暗影を呈することがあり、或は竇の淺い時には深いものに比して影像は溷濁を呈すること等もあるから、前額竇の診斷には細心の注意を要するものである。

前額竇のレ線檢査は竇炎の診斷の外、前述の如く手術の指針としても重要である。即ち竇の廣狹を知ることによつて手術々式を選擇し、また手術に際しては像と對照しつゝ分離せる多房性竇の一部を遺殘することなどの失敗より免がれ得るのである。

篩骨蜂窩炎及び蝴蝶竇炎

四、篩骨蜂窩炎及び蝴蝶竇炎

篩骨蜂窠竝びに蝴蝶竇は前額竇と同樣に或はそれ以上に個人的差異が甚だしい。汎用せらるゝ撮影法は矢張後頭顔面撮影法である。この法による影像の分析は稍々困難であるが、少しく熟練する時は前後篩骨蜂窩及び蝴蝶竇の各個に就き相當に釋明し得る。即ち前篩骨蜂窠炎のみ存する時は眼窩內に現はるゝ後篩骨蜂窠は鮮明に見ゆる。また篩骨蜂窩が健全なる時に猶ほこの部に陰影を見れば蝴蝶竇炎に由來せるものなることを考へ得るのである。しかし既に篩骨蜂窠炎の存する場合には蝴蝶竇の診斷は最早不可能となる。斯樣な場合にはレゼ氏斜位撮影法または軸位撮影法を行ふのである。これらの方法を用ゆる時は篩骨蜂窩及蝴蝶竇は各々別個に投影せられ、その間壁もまた鮮明に見られる、またレゼ氏法にて立體撮影を行へば、極めて明瞭に病變部を判定し得るのである。横位撮影法はたゞ周圍臟器との關係を究明するに止まるが、蝴蝶竇炎の診斷に際しては有力な材料を得ることがある、篩骨蜂窠炎竝びに蝴蝶竇炎の場合にもレ線像により、その竇內容が果して膿汁なりや、茸性增殖性粘膜なりや、將又骨新生に歸因せりやの鑑別は殆んど不可能である。たゞレ線學的に暗影を呈する場合には、上述の何づれかの病變が現存するか、または過去に炎衝過程を經過せしことを知り得るのである。

篩骨蜂窠及び蝴蝶竇と近接臟器との關係の中では鼻性球外視神經炎が重要なものである。本病に於ては

蜂窠の病變が高度なることもあるが、また極めて輕症にてレ線學的に證明困難なることもある。しかし後者の場合に於ても視力の漸次消耗昂進する危險があるから、種々の撮影法を併用して病竈部位を探究し以つて手術の指針たらしむ可きである。

鼻腔及び副鼻腔腫瘍

五、鼻腔及び副鼻腔腫瘍

良性腫瘍のうち骨腫のレ線像は一目瞭然である。手術に際しては種々の方向より檢索することによつて、原發竈の周圍の關係を明かにし手術の萬全を期せねばならぬ。

惡性腫瘍が臨牀上著明なる症候を呈せざる時に、早期診斷をなすことは最も重要なのであるが、この時期に於ては遺憾ながらレ線像上蓄膿症との鑑別は極めて困難な場合が多い。これに反して腫瘍が發育して周圍骨壁を少しく破壞するに至れば、診斷は極めて容易になる。周圍骨壁の破壞未だ尠なき時に於ても、腫瘍の性質によりては陰影の狀態より、蓄膿症との鑑別可能なることもある。一般に鼻腔の腫瘍は臨牀上に於けると同樣にレ線像にあつても概して判定容易であると同時にこれと副鼻腔との關係を明にし得る利點がある。

腫瘍の猶ほ小なる時に造影劑を注入して容易にこれを證明し得ることがある。

腫瘍の增大せる場合にありては種々なる方向より撮影して、その浸潤狀態または近接臟器との關係を明にし、從つて手術の適應並びに術式を定め得るのである。

咽喉科レントゲン診斷學

III、咽喉科「レントゲン」診斷學

咽喉科に於ては喉頭鏡檢査、殊に最近著しく發達したる直達鏡檢査法に由つて微細な病變をも認め得らるゝようになつたが爲めに、レントゲン診斷學は耳鼻咽喉科領域では本科に於て最も輕視せられる狀態である。

しかし實際には喉頭鏡或は直達鏡檢査に由つては、主に粘膜の表面に於ける病變を明かにすることは出來るが、尙ほ深部にある軟骨或は骨等の變化はこれを判定することが出來ない。また種々の原因による喉頭或は氣管の狹窄、例へば喉頭の入口部に介在する腫瘍のために、聲門浮腫の存在する時等の場合には、上述の檢査法を行ひ難い。

これらの場合にはレントゲン影像が診斷上重要な位地を占めることになる。

往時は頸部のレントゲン撮影と云へば僅かに誤嚥せられたる金屬性異物の存在、位置の證明または頸椎の診斷に用ひられたるに止まり、一般に臨牀上の應用範圍は極めて狹かつたもので、當時は生體に就て喉頭部それ自身の病的變化を檢索するには至らなかつたのである。これは一には當時の撮影技術が不備なために呼吸、嚥下運動等によつて障碍せられ、生體に就ては鮮明なる像を得なかつたにも由る。

しかし屍體の摘出喉頭に就ては、シヤイエル(Scheier)氏が既に一八九六年に系統的に喉頭軟骨の化骨機轉を研究し、後ちには、エー、フレンケル(E. Fränkel)氏が同じく摘出喉頭の多數に就て觀察し、シ

ヤイエル氏と同樣の成績を得て居る。兩氏はこの研究によつて性及び年齡による喉頭軟骨の石灰化並びに化骨機轉に關する一定の規律を認むるに至つた。尙ほ、シャイエル氏は甲狀軟骨のレ線像によつて男女の性を判定し得ると稱して居る。たゞ兩氏の研究は材料に用ひた屍體の疾患を顧慮して居らず、フレンケル氏の如きは諸種疾患は喉頭軟骨化骨機轉に影響することが僅少であると云ふ見解に傾いて居るようである。後ちにシャイエル氏は去勢者の喉頭を檢索し、次いで實驗的に牝牛を去勢したる後ちの狀態を觀察して、去勢の喉頭軟骨に及ぼす影響を論じ、遂に病的狀態に因る喉頭軟骨の變化に關する問題に論及して居る。

尙ほシャイエル氏は一八九八年生體に於ける聲音生理學(Stimmphysiologie)の研究業績を發表した。喉頭疾患のレントゲン的觀察は更に寥々たるもので、稀に報告を見るのみであるが、獨りアー、トースト(A. Thost)氏が生體に就て稍〻系統的に各種喉頭疾患のレントゲン像を追究し、光輝ある業績を殘して居る。

現今喉頭部レントゲン診斷に際しては、喉頭軟骨の化骨狀態が重要なる位置を占めて居る。その撮影には軟光線を用ひ側方撮影が殊に賞用せられる。時として造影食を與へて食道始部との關係を檢する必要のあることは勿論である。善良な寫眞像に於ては喉頭部の軟骨の狀態は勿論その內部或は周圍の軟部組織の狀態も明かに認め得らるゝのである。

健康喉頭のレントゲン像

健康喉頭のレントゲン像

生理的に年齡と共に增進する喉頭軟骨の石灰化または化骨機轉を詳細に熟知することは喉頭疾患の診斷に當つて甚だ重要なる事項である。

喉頭軟骨の化骨または石灰化の過程に關しては、レントゲン線發見以前に於て既に觀察せられて居る。即ち、ショッテリウス Schottelius 氏は組織學的に、ヒーヴィッツ Chievitz 氏は乾燥せしめたる喉頭軟骨を針を以つて穿刺して、その化骨狀態を知る獨特な方法を用ひ、またベルゲアト Bergeat 氏は喉頭軟骨を燒却して、その石灰殘量を化學的に測定し、夫々精細なる研究を行つて居る。

喉頭軟骨の石灰化若くは化骨はショッテリウス氏によれば、決して老齡現象ではなく性的發育と密接なる關係ありと言ふ。卽ち喉頭軟骨は春期發動期以前には血管を伴はぬが、その後血管の新生と共に石灰化機轉を認め得る。また一般に筋靭帶の附著部等には石灰化が强い。石灰化乃至化骨機轉は種々の疾病によつて影響せられる。例へばベルゲアト(Bergeat)氏によれば慢性結核症には殘灰量減少し、他の羸瘦者には增加して居る。

本邦人喉頭軟骨の化骨機轉に就て保科氏の研究によれば喉頭軟骨の正常化骨は男子は二十歲前後に發し、女子は男子より稍〻早期に化骨を認む。

甲狀軟骨化骨の第一骨核は、側板最後下部で下角に接近したる部分に、一乃至數個の初期小骨核として

現はれる。これに次いでは下結節部及び隅角部に骨核を生ず。爾後の化骨經過は側板最後下部の骨核が下結節部骨核と癒合して側板下縁を前進するのであり、女子に於ては側板最後下部に發生したる初期骨核主として側板後縁に沿うて化骨を進める。その後漸次蔓延して遂には甲狀軟骨の全般に亙りて化骨するに至る。この化骨機轉は爾後年齢と共に增加するが、年齢的差違よりも個人的差違が遙かに大である。しかし甲狀軟骨の化骨には著明なる性的特徵があり、或程度までは化骨狀態によつて男女の性を區別し得るのである

甲狀軟骨に次いで環狀軟骨が化骨するのであるが、これらの化骨機轉には性的特徵は認められ無い。聲樂家、俳優等の特種な職業の者には喉頭軟骨の化骨機轉が一般に著明である。

各種喉頭疾患のレ線像

各種喉頭疾患のレ線像

各種喉頭疾患の生體に於けるレ線學的研究は寥々たるもので、成書にも詳細なる記載は無い。獨りトーースト Thost 氏の業績は系統的な研究であり、現今に於ては以つて參照すべきの文獻を提供したものであると云へ得る。

喉頭結核

喉頭結核のみならず一般喉頭疾患にありては喉頭鏡檢査によりても、表層粘膜の變化は極めて詳細に望見し得らるゝのであるが、一度粘膜下に入りては喉頭鏡によりては最早診斷し得ないのであつて、たゞ病理解剖或は經驗等によりて推測するのみである。

この點に關してレントゲン線所見は重要性を帶ぶるものであつて、また治療方針の樹立に際してもレントゲン線の補助に俟つこと甚だ大である。

喉頭結核に於て特に軟骨の病理解剖學的研究は、ショッテリウス Schottelius 氏が正常喉頭軟骨の化骨機轉より出發して微細に觀察して居る。結核病者及び惡液質患者の喉頭軟骨は脂肪浸潤を來たし、その結果赤褐色の髓腔は透明黃色粘液性內容に變化する、軟骨は年齢に伴はざる堅牢性と白堊質の如き强固さを有するに至る。かくの如き變化は環狀披裂關節附近に特に著明である。一方化骨機轉は正常の場合と異なり、化骨の經過中にあるものもまた既に經過せしものにありても骨組織はその量を減ずる。卽ち骨組織に代りて石灰浸潤を見るのである。

前述の如く健康喉頭にありては年齢と共に化骨增加し、從つてそのレ線像は益〻濃厚鮮明となるものであるが、トーースト氏は喉頭結核患者のレ線影像に於ては、喉頭軟骨の鮮明なる化骨像は認められず、每常溷濁せる不鮮明なる像を得たと言ふ。由りて彼はこれを結核に特有なりとし、これを溷濁調(matter Ton)と稱したのである。

ショッテリウス氏の研究は喉頭には未だ病變を認められない肺結核患者に就て行なつたものであるが氏はこの化骨抑制をば惡液質と結核による榮養障碍とに歸結せしめて居る。しかも化骨機轉の變化は局所

羅患の素因をなすことは言を俟たない。トースト氏の成績は喉頭自身にも既に病變あるもの、及び未だこれを認めざるものに就き、何れの場合にもそのレ線像に於て特有な溷濁調を證明して居るのである。これは卽ち、ショッテリウス氏所見をレ線學的に證明したものと云ひ得る。軟骨の變化は一般に惡液質の結果であり、結核のみならず他の惡液質、肥胖病者にもまた表はれるが、獨り喉頭結核のレ線像は特有にして每常溷濁調を見るのである。

軟骨以外の軟部組織の變化もまたよく影像を與ふることが多い。例へば聲帶の腫瘍、腫脹、肉芽等はモルガアニー氏竇の明い部分に陰影を生ずる。卽ち喉頭の後部に浸潤する時はモルガアニー氏竇の後部は暗影を呈し、聲帶、假聲帶共に浮腫性に腫脹せる場合には、モルガアニー氏竇の明視部は最早現はれないようになる。

喉頭黴毒のレ線像

喉頭黴毒に際し粘膜のみならず尙ほ深部に進み軟骨まで侵さるゝ場合は極めて稀である。喉頭黴毒は氣候、年齢等によりて病變に變化を來たすものと言はれて居るが、本症は幸に本邦には比較的に尠なきが如く、鼻或は咽頭腔の黴毒性變化が可なりに廣汎なる場合にも、喉頭には何等異常のないことが多い。若し變化ありとするもたゞ表層粘膜のみが侵される場合が多いのである。

喉頭黴毒で軟骨の一部殊に會厭軟骨の破壞を來たせし場合は勿論レ線撮影によつて明瞭に證明せられる。

ハーン竝びにダイケ Hahn u. Deycke 氏の骨及び軟骨に於ける黴毒性病變の研究によれば、これらの病機は骨膜に限局する場合多く、且つこの骨膜炎には單純性及び護謨腫性に分たれる。しかして單純性骨膜炎にては先づ骨乾瘤を生じ、これは後ちに化骨する、そして遂には廣範圍に亙る化骨を現ずるのである。

一方護謨腫骨膜炎にありては、病竈の末梢部は硬化し贅骨を生じ、または時としては骨乾瘤を生じ、これらには皆石灰沈著を來たすのである。從つて明瞭なるレ線影像を示すに至る。軟骨の骨乾瘤は恰も鋸齒狀の眞珠頸飾狀の如き石灰の陰影斑點を與ふる。

この外咽喉科領域にては喉頭の小良性腫瘍發生し、モルガアニー氏竇に形態的變化を起さしむるが故にレ線撮影により診斷し得るのである。

頸椎または喉頭の外傷等の診斷もレ線像を俟つて初めて完璧を期し得るものであり、また上氣道の狹窄にありてはレ線撮影によつて狹窄部位を明確に知り得るのであつて、特に小兒の如く直達鏡檢査を充分に遂行し得られない場合にはこれが唯一の方法なのである。またこれが治療に當りて套管の位置、擴張器の適否等を知るにはレントゲン檢索極めて便宜である。トースト氏の光輝ある研究もシュレッテル氏の門下にありて上氣道狹窄を治療するに當り、レントゲン檢索を用ひしことに始まつたのである。

喉頭癌のレ線像

喉頭癌にありてもそのレ線像のみを以てしては明快に判定し的確に診斷すること困難であり他の疾患の場合と同樣に必ずやその病理解剖竝びに組織學を熟知するの要がある。

喉頭癌はその發生部位によりこれを內外喉頭癌の二つに分けられる、內喉頭癌は主として聲帶より發生し、外喉頭癌は梨子狀窩より生ずるものが最も屢〻である。梨子狀窩の如きは隱蔽せられたる部位にして初めは何等の症狀をも呈しない場合が多く、その中に腫瘍は漸次發育し、粘膜を穿破して會厭軟骨または咽頭腔內に發育增大し、或は喉頭內へ浸潤するに及んで初めて顯著なる症狀を呈するものが多い。しかし時には何等認むべき他覺的及び自覺的症狀のない時期に早くも頸部淋巴腺轉位竈により診斷せらるゝこともある。

腫瘍の咽頭腔內へ發育せる時、または會厭軟骨を侵襲しこれを包纏せる場合には、レントゲン撮影によつて極めて明瞭なる像を呈するのである。

この時期にありては臨牀上の症候も備はり、喉頭鏡檢査によりても亦容易に診斷せられるが、詳細にその狀況を檢し或は初發部を知り、手術の適應等を定めんとする時はレ線診斷の資するところ甚だ大である、特に腫瘍自身或はその他の障礙によつて喉頭鏡檢査の成績充分ならざるが如き場合にはレ線所見は專ら重要なる指針を與ふるものである

癌腫が未だ崩壞せずその浸潤も單に軟骨を纏絡するに過ぎぬ間はレ線像によるも軟骨の變化は一般に輕度である。卽ち軟骨の陰影は略ほ正常なる狀態に於て認められ、軟骨の石灰含有量多ければ多きほど換言すれば高年者なればなるほど軟骨の影像は明瞭なのである。軟骨が既に骨髓を有し血管を有する場合には腫瘍は直接骨髓內に發育侵入するに至る。腫瘍の崩壞し癌性潰瘍を形成するに至ればまた骨髓內に浸潤することも急速である。

軟骨組織自身に於ては第一に軟骨基質次に軟骨細胞の順序に侵される。

兎に角に腫瘍が軟骨を侵すに至ればショッテリウス氏の證明せしが如く或は軟骨膜より或は軟骨內にては既存軟骨細胞の分裂により軟骨または骨組織が添加性に新生せらるゝのである。同時に他方に於ては腫瘍の侵襲により、或は軟化崩壞により、軟骨及び骨組織は破壞吸收せられる。されば或部位には骨質の熔融消耗を認め、また或るところには骨質の不規則なる新生を見るものである。

前記の事實より容易に推測せらるゝが如く、本症のレ線像にありては腫瘍に侵されたる軟骨部に不規則顆粒狀の骨質陰影を示すもので、これら陰影の濃淡或は配列もまた甚だ不規則である。

しかれども時としては軟き腫瘍の急速に軟骨を侵かし、これを崩壞せしむる時は主に化骨部の消耗せらるゝ狀現はれ、軟骨或は骨の新生はたゞ痕跡に止まり、初期に於ては結核の際に見らるゝ所謂溷濁調(matter Ton)と誤らるゝが如きレ線像を呈することがある。

索引

A

アショッフ氏　三九
アデノイド顔貌　九六
アルブレヒト氏　一三一
アレキサンデル氏　一九九、一七八、一四八、一四七
アレキサンデル氏及びペチヂー氏　一八八
アブデルハルデン氏　二三七
アセンブラント氏　三一〇
アトファン　三五四
亞砒酸　四三二
アンチモン　四三四
アンチピリン　四三四
アトロピン中毒　四三五
鞍鼻　五三五
アヂソン氏病と粘膜變化　七八〇
惡性甲狀腺腫　八〇八

B

鼻咽腔疾患　四三
鼻咽腔炎　四三
病理及び臨牀　四七
鼻咽腔炎急性發作　四八
鼻呼吸閉止　五〇
鼻咽閉塞の原因　五六
鼻咽腔炎と全身關係　七八、五七
鼻咽腔炎及び神經系統　五七
鼻咽腔炎及び痙攣症　五八
鼻咽腔炎と渴　五九
鼻咽腔炎及び授乳困難　六三
鼻局所療法　六四
鼻感冒　六七
鼻咽腔疾患兼咽頭扁桃腺炎　七九
鼻性喘息　八〇
鼻咽腔炎及び神經症　八〇
鼻咽腔炎及び身體障碍　八三
鼻中隔潰瘍　八四
鼻腔異物　八五
鼻腔及び咽頭局所疾患　九六
鼻性注意力消失症　一〇一
ペロック氏タムポン　一〇二
ペックマン氏輪狀刀　一〇九
鼻中隔膿瘍　一四〇
ポホダレク氏　一四八、一四七
ペ子ヂ氏　一五〇
ペルペリヒ氏　一六五
ペツトマン氏　一七六、一七四
病的含氣蜂窠生成　一〇四
パウエル氏　二〇四
部分的異時性老人性過度萎縮　二〇九
ブルン子ル氏　二二九
ブライアン氏　二五〇
部分性白病　二七九
病的色素顆粒　三〇一
鼻咽性中耳疾患　三〇六
鼻腔、咽頭及び喉頭　三〇七
鼻咽喉及び肺　三一九
ペツオルド氏乳嘴突起炎　三三五
鼻呼吸障礙に伴ふ口腔の疾患並びにその變形　三九三
鼻性視神經炎　三九四
微毒性視神經炎

鼻性反射神經疾患　三九七
ベンゾール屬　四三四
鼻結核　五〇一
鼻中隔膿瘍　五〇二
鼻中隔穿孔性潰瘍　五一三
黴毒　五一二
鼻黴毒　五一一
黴毒性臭鼻症　五一一
黴毒性筋炎　五一九
鼻癩　五二六
鼻咽喉癩　五三九
馬鼻疽病　五四一
ベヒテレフ氏隅核　五五二
部位感覺　六一八
ベヒテレフ氏實驗　六二一
猫鳴　六三五
馬尾核　六八六
舞踏病　七〇一
馬鐙神經　七一六
鼻腔に對する性的影響　七三九
鼻性侵入門　八四四
パラニー氏鼓槌　八六六
パラニー氏十四ヶ條　八六八
暴力死に於ける耳の變化　八八一
ブッシュ氏口腔内撮影　九二一
鼻科レントゲン診斷學　九二八
ブッキー氏ブレンデ　九三〇
鼻腔及び副鼻腔疾患のレ線像　九三四
鼻腔及び副鼻腔腫瘍　九四〇

C

中耳炎の合併症　一四
聽力障礙　三五
中耳炎の全身に及ぼす影響　四〇
腸症狀　七一
蟲樣垂炎　七三
陳舊性鼻咽腔カタル　九七
窒息並びに喉頭閉塞　一〇一
中耳炎併發　一〇九
長頭顱、短頭顱　一一
聽小窩　一四〇
聽小囊　一四〇
中耳疾患　一六六
中耳炎並に中耳加答兒　一六六
中耳腔　一六九
聽器低格性　二一四
中胎生性、後胎生性　二四一
聽神經幹畸形症　二四四
中樞聽器畸形症　二四四
中耳及迷路囊退行變性　二四四
聽神經幹退行變性　二四四
中樞聽神經退行變性　二四四
中耳過壓　二九八
中耳炎より扁桃腺周圍膿瘍形成　三二九
中耳炎に對する腎臟病の影響　三五九
中樞性聽器障礙　三六二
中耳の内壓增進　三七七
中毒疾患編　四一九
腸窒扶斯　四五五
聽能過敏　四六七
聽器結核　四八七
聽器黴毒　五一三
中耳硬化症　五一四
聽器の神經裝置　五一五
聽器癩　五三三
聽神經構造並ニ徑路　五四八
聽神經節　五四七
中樞並ニ中樞徑路　五四九
中樞性聽道　五五四
聽神經の順路　五五五
聽線　五五六
直接感覺性小腦徑路　五五七
聽域の核層　五六四
中頭蓋腔　七一八
聽器ノイローゼ　七三五
聽器障礙發現の時間的關係　八三七
聽力檢査法　八六三
中等度重聽　八六四
中耳銑創　八九三
聽器震盪症　九〇三
聽器外傷性ヒステリー　九一五

D

ヂフテリー　四七三、四
ヂフテリー及び黴毒　八三
傳染病に罹り易きこと　九八
脫肛　九九
吃音　九九
ヂフテリー血清　一〇七
ダァーヴィン氏隆起　一一八
男女兩性を考慮　一二七
彈力纖維增殖　一九七
動脈硬化性血行障碍　二〇三
デンケル氏　二三三
傳音器官畸形症　二四四
大動脈瘤　二六七
大臼齒停溜　三三五
ヂフテリー性炎　四四四、三七四
銅　四三四
第二型鼻結核　五〇三
第三型鼻結核　五〇四
橢圓囊壺腹枝　五四七
ダイテルス氏核　五五二
吶吃　六四三
唾液分泌　七一四
唾液腺と内分泌腺　七八三
唾液過多症　七八五
動脈硬化症と重聽　八三五
鈍力に依る損傷　八九四

E

エスペンシアイド氏　一五
エーヂンゲル氏　八三一、二〇四、二〇三
嚥下性肺炎　四七九
圓錐形浸潤　五一〇
會厭軟骨浸潤　五一一
會厭軟骨癒着　五三二
會厭軟骨前屈症　五三二
嚥下　五九七
嚥下機　六二三
延髓疾患　六五三
延髓球麻痺　六五四

延髓及び橋疾患　六六八
延髓球末梢ノイロン　六四四
エルブ氏ゴルドフラーム氏オッペンハイム氏病　六七六
延髓末梢麻痺　六八三
嚥下障礙　六九三
エレクトロコアグラチオン　七八九
江面氏聽器撮影法　九二三

F

フィッケルスタイン氏不安狀態　五五
フレンケル氏　五七
フェルレリ氏　九二
フレムミング氏副鼻腔疾患　九二
副鼻腔單純疾患　一〇八
不働性萎縮　三〇〇
腐敗性中耳炎　三二八
腹位核（腹側神經節）　五五〇
フリース氏說　七四二
副甲狀腺腫　八一一

G

ゴムペルツ氏耳鏡　三九
ゲルペル氏の統計　三七、七
ゴムペルツ氏　一〇
外旋神經麻痺　一六
グラデニゴ氏眼球震盪　一四
外科的中耳疾患及び合併症　三一
岩樣骨疾患　三三
グリセリン、メンタ水、アルコホル　六三
グリユンワルド氏　七六
グロスマン氏下熱劑　七九
外側並びに正中咽頭腺又咽後腺　八二
外側深部項腺又深部項腺　八五
原因的關係　九〇
外傷性アンギナ　九二
ゲルケ氏　九二
言語障礙　九八
ギューリツヒ氏合併性副鼻腔疾患　一〇五
外耳疾患　一〇九
グラデニゴ氏　一一一
グルーチルト氏　一二六
外聽道重複症　一四一、一二六
外聽道畸形症　一二八
原耳部　一四〇
外聽道外發骨腫　三五〇、一五一
誤生素地　一五六
外聽道濕疹　一五九
劇嗅覺　二七七
鵞口瘡性耳炎、　三二八
外聽道異物（歐氏管經由）　三二八
外耳炎より扁桃腺周圍膿瘍形成　三二九
外聽道瘙痒　三四九
眼科病篇　三七五
眼と聽器との關係　三七五

眼と鼻との關係　三八二
原發性骨髓炎　四五六
原發性顎症性腺疾患　四六五
限局性ロイマチス性急性喉頭炎　四七二
外聽道ヂフテリー性炎　四七四
原蟲病篇　四八三
原發骨結核　四九〇
眼球震盪　五一七
蒟蒻腫　五二〇
外鼻變形　五二七
外後枝　五五〇
原纖維性搐搦　六〇九
ガツセル氏神經節　六一二
語音　六二五
言語　六三七
言語の構語障礙　六三八
言語障礙　六三八
言語誤脫症　六四二
疑核　六六九
顏面神經　七一五
顏面神經麻痺　七一五
月經と耳硬化症　七四七
月經閉止期と耳硬化症　七五二
外聽道檢査の標準　八五九
外聽道壁の性狀　八五九
外聽道腔の形狀　八五九
外聽道の內容　八五九
岩樣骨々折　八九八
外傷性鼓膜穿孔　九〇五

H

ハルトマン氏耳用鉗子　一〇五
扁桃腺の變化　一〇六
扁桃腺アンギナ　一〇六
反射症狀　一〇七
反射性癲癇　一一七
敗血症　一二六
非化膿性疾患　一五二
發育障礙　一六〇
白血病　一八五
扁桃腺周圍膿瘍　一九二
扁桃腺より發する敗血症　一〇五
扁桃腺療法の適應　一〇六
扁桃腺切除法　一〇六
扁桃腺剔出法　一〇七
ハルトマン氏扁桃腺挫滅子　一〇八
ハイケ氏　一〇八
變性の徵　一一七
ビス氏　一二六
發育期畸形症　一五二
ヘブラ氏　一六〇
發育不全體質　一八五
皮樣腫　一九二
胚芽素因性　二一二
ハムメルシュラーグ氏本遺傳性聾啞　二三四
變性體質　二四〇
貧血症　二五三
白血病　二七五
白血病の聽器　二七八
白血病性粘膜壞死　二七八

白血病性腫瘍　二八五
白血病性扁桃腺　二八五
變嗅症　七〇五、二九一
肺疾患で起る上氣道變化　三一五
本態的硬化症　三六五
ハウグ氏
變性子フローゼ　三六六
鼻と眼との脈管關係　三七一
反射ノイローゼ篇　三八七
風　疹　三九七
肥厚性扁桃腺　四五四
表面性肉芽　四九六
披裂軟骨關節浸潤　五〇八
披裂會厭關節浸潤　五一〇
半月形門齒　四一一
變形黴毒と耳疾患　五一七
扁桃腺並に咽頭黴毒　五一九
瘢痕期　五二七
放線狀菌病　五三七
脾脫疽病　五四三

本來聽神經　五四五
背位核（聽隆起）　九〇二
皮質徑路
ヘルド氏交叉
皮質聽野　五
發音中樞　二一〇
發聲筋　五三
ハイ子メヂン氏病　五四
半側延髓球麻痺症狀、複雜性半側性喉頭麻痺症　三〇〇、九四、五七
被　殼　六〇
反射障碍　六一
歇斯的里　六六
半身知覺脫失　六九
歇斯的里昇　七三
歇斯的里性失聲症　七五
歇斯的里性喉頭音　七五
ヘッド氏說　九九、七八
法醫學篇　八四
非死的損傷　八八
破壞或は複雜骨折　八八
ヒステリー性耳出血　八八

I、J

移行型中耳炎　五
異型骨疾患　二一〇
咽頭咳嗽　五三
一般狀態　五四
咽頭扁桃腺肥大　三〇〇、九四、五七
胃ゾンデ　六〇
一年兒と再發性鼻咽腔疾患　六一
一歲以後小兒鼻咽腔炎　六六
咽頭扁桃腺炎　六九
咽頭敗血症　七三
一般型　七三
咽頭淋巴環合併症　七五
萎縮性鼻咽腔炎　七五
夜驚症　七五
異物抽出法　八四
沃度フォルムグリセリン　八八
咽頭淋巴腺疾患及び咽後膿瘍　八八

咽後膿瘍　八八
咽頭側壁腺化膿症　八九
ヤースレー氏
咽頭扁桃腺肥大症及び年齡　九六
夜尿症　九九
一歲兒の鼻咽扁桃腺肥大症　九九
壞疽性咽頭炎　一〇三
異常離立（耳翼）　一二五
異處的複生　一三一
遺傳性耳瘻孔症　一三四
遺傳性耳瘻孔症　一三五
遺傳性第一腮裂瘻孔症　一三五
遺傳性膜生成　一四二
遺傳性外聽道閉塞症　一四二
遺傳體質　一八五
欲病性　一八五
遺傳性家族性素因　一九〇
遺傳性中耳腫瘍　一九三
遺傳性有毛耳茸　一九四
異處成型物　一九四
遺傳性聾　二一〇九
遺傳性有毛咽頭ポリープ　一九四
遺傳性變格性聾　二一三
幼年性進行性內耳疾患　二四〇
有殼被膜　二四七
遺傳性變格性徵候　一五三
右側腋下動脈瘤　二七三
イタアル氏
胃性咳嗽　二三一
沃度鹽類　二三四
沃度中毒　二三五
インフルエンザ　二三五
胃腸型　二四二
インフルインザ鼻炎性鼻血　二四二
ヤボランヂ浸　二八五
咽頭並ニ喉頭ヂフテリー　二八五
咽頭結核　一九〇
遺傳性並に變形黴毒　一九三
遺傳黴毒と耳疾患　一九四
咽頭黴毒　一九四
有莖癰腫　二一〇九
咽頭癰　一九四
咽喉の神經中樞徑路　二一三
咽頭の運動支配及び生病理　二四〇
咽頭反射消失　二四七
咽頭痛覺脫失　一五三
咽頭喉頭知覺過敏　二七三
咽喉變調感覺　三三二
咽頭發症　三四二
遺傳性筋緊張症（トムゼン氏病）　四三一
遺傳性筋緊張（オッペンハイム氏病）　四三三
遺傳性失調症（フリードライヒ氏病）　四五八
一側舌麻痺　四六一
幼年型假性延髓球麻痺　四六二
咽喉及び舌の障礙　四六八
ヤコップソン氏神經　五〇四
沃度カルシウムヂウレチン　五一六
咽頭淋巴性侵入門　五二五

頤下垂直撮影法　九三
咽喉科レントゲン診斷學　九四一

K

急性中耳炎　四
輕症中耳カタル　四七、四八
カルボール、グリセリン　六
カルボール、コカイン　六
急性中耳炎と刺戟症狀　九
鼓膜穿孔の大小及び種類　一一
骨疾患　一八
急性乳嘴突起炎　二〇
硬腦膜外膿瘍　三三
ケルニヒ氏症候　二七
化膿性腦膜炎　二七
鼓膜所見　三五
家庭生活　四四
後鼻管　四六
局所症狀　四八
鼓膜　五一
後咽部發症　五二
顆粒性咽頭炎　九三
假性ヂフテリー　九四一
下部氣道の影響　
痙攣性氣管枝炎　
後鼻炎　
急性鼻咽腔炎と消化器　
急性發作時の榮養　
急性鼻咽腔炎　
後咽部炎症　
後咽部特種症狀　
高熱遷延　
急性鼻咽腔炎及び合併症　
痙攣症　
急性發作の療法　
キーゼルバッハ氏部　
蛔蟲及び咽頭扁桃腺肥大　
急性化膿性炎症　
頸腺腫脹　
頸椎強直　
頸椎カリエス　
口呼吸及びその續發症　六八、五三
血像變化　五三
後出血　五四
禁忌症　五四
コブラック氏　五五
クロルエチール　五九
口蓋扁桃腺疾患　六四
口蓋扁桃腺肥大症　六七
關節ロイマチスムズ　六七
隔世遺傳　六八
ケッセル氏　七〇
鼓室壁罅裂　七二
鼓室底　七八
カッツ氏　八二
後胎内性　八三
後天性聾啞　八三
個性後天性内耳疾患　八七
感音器官畸型症　九〇
鼓室性内耳炎　九〇
血行性内耳炎　九〇
血族結婚　二五〇
血行器病篇　二五五
後交通動脈　二六三
氣管搏動　二七一
血液病篇　二七五
鼓室出血　二八一
假性白血病　二八五
クロローム　二八五
血友病　二九〇
鼓膜血點　二九二
壞血病　二九二
呼吸器病篇　二九五
輕氣球　二九八
鑛山病　二九八
鼓膜の呼吸運動　三〇二
呼吸器諸疾患と聽器疾患　三〇四
呼吸道としての鼻腔　三〇八
呼吸部　三〇八
嗅部　三〇八
口呼吸　三一一
呼吸道としての咽喉　三一一
迷歸神經麻痹　三一六
氣管喉頭周圍神經節　三一八
胸腺喘息　三一九
口腔疾患　三二一
下顎神經節　三二二
下顎管　三二五
コレラ聲　三二五
急性浮腫　三二五
假尿毒性　三二五
鼓神經叢　三二五
球外視神經炎　三二五
假面性副鼻腔炎　三二五
局所性素因　三二五
個人素因　三二五
關節炎性素質　三二五
夏期カタル　三二五
夏期喘息　三二五
加答兒性喘息性　三二五
枯草熱　三二五
格魯兒酸亞鉛　三二五
格魯謨酸　三二六
喉頭浮腫　三二八
キニーネ中毒　三二九
急性傳染病篇　三三一
格魯布性喉頭炎　三三三
加答兒性猩紅熱安魏那　三三五
潰瘍性炎症、　三三五
化膿性鼻炎　三三五
喉頭水腫　三三五
喉頭粘膜浮腫　三三五
喉頭軟骨膜炎　三三五
急性傳染病篇　三三五
急性多發性關節炎　三三五
加答兒性喉頭炎　三三五
喉頭關節炎　三三五
後ヂフテリー麻痹　三三五
喉頭粘膜知覺脫失　三三五
急性敗血性喉頭炎　三三五
間歇性耳炎　三三五

間歇性失聲症 四八五
結核性原發性骨髓炎 四九〇
廣汎性結核性骨化膿症 四九〇
下行性頸腺結核 四九六
結核性軟骨炎 四九七
結核性軟骨膜病變 四九七
結核腫 五〇一
廣汎性浸潤並に潰瘍 五〇一
骨結核並に續發性粘膜疾患 五〇一
結核性臭鼻症 五〇四
喉頭結核 五〇六
假聲帶浸潤 五〇七
假聲帶結核腫 五〇七
潰瘍型 五〇八
喉頭浮腫 五一〇
後壁廣軌浸潤 五一〇
間質性角膜炎 五一五
コンヂローム增生 五二六
口蓋咽頭粘膜黴毒 五二六
口蓋扁桃腺黴毒 五二六
口吸氣性喘鳴 六三六
構語 六三六
構語器關 六三七
クスマウル氏構語障礙 六三七
口唇 六三九
機能性麻痺 六四〇
痙攣性失語症 六四一
蝸牛殼神經終末萎縮 六四八
喉頭發症 六五〇
筋運動緩慢 六五〇
筋疲勞症 六五二
筋衰弱症 六五二
筋麻痺 六五四、六五二
急性脊髓前角炎 六五四
筋萎縮性側索硬化症 六六〇
假性延髓球麻痺 六六二、六六〇
痙攣性脊髓性麻痺 六六一
急性延髓麻痺 六六八
孤立束核 六六九
硬性肉芽腫瘍 五二八
喉頭黴毒 五二九
紅斑及ビ丘疹 五二九
廣性贅肉 五三〇
結節黴毒疹 五三〇
廣汎性ゴム腫浸潤 五三三
廣汎性粘膜增殖 五三六
乾性鼻炎 五三六
乾性前鼻炎 五三七
潰瘍期 五三七
血痂成生 五三八
懸壅垂變化 五三九
懸壅垂 短縮 五三九
喉頭癩 五三九
乾性喉頭炎 五四二
口峽炎及ビ蹄疫 五四四
頸部アクチノミコーゼ 五四四
狂犬病 五四四
呼吸性痙攣 五四四
蝸牛殼根 五四八
橋小腦窪 五四九
弓狀束 五六六
喉頭の運動支配及び生病理 五七七
下喉頭神經(廻歸神經) 五七七
後筋麻痺 五七九
環狀甲狀筋孤立性不全麻痺 五八三
甲狀會厭筋及披裂會厭筋麻痺 五八三
構語 五九七
絞扼 五九七
强迫笑 六〇一
頰吹試驗 六〇五、六〇一
喉頭反射 六一四
灰白翼 六二六
完全性嚥下不能症 六二八
呼吸 六二九
呼吸筋 六三一
强行呼吸時 六三三
喉頭呼吸 六三四
呼吸筋 六三五
構語筋 六三五
筋衰弱症 六七六
核上麻痺型 六八三
假性硬化症(ウエストフアル氏ストリユムペル氏病) 六八八
共齊運動裝置被害 六九一
喉頭麻痺 六九二
口蓋筋咽頭筋及び喉頭筋の局所性痙攣 六九四
孤立性軟口蓋痙攣 六九五
喉頭舞踏病 七〇一
喉頭咳嗽 七〇七
下眼窩神經痛 七一二
鼓索神經 七一三
後頭蓋腔 七一九
甲狀腺製劑 七二四
鼓膜リポイド弓 七二六
カルシユウムヂウレチン 七二七
血糖低下反應 七二九
嗅覺及び內分泌 七四二
クレチニスムス 七六三
口蓋扁桃腺、咽頭扁桃腺及び內分泌 七七八
乾性鼻咽喉カタルと內分泌 七八一
頸囊腫 七九〇
甲狀腺 七九三
胸腺 七九五
喉頭氣管枝及び食道 七九六
甲狀腺、胸腺及び喉頭氣管、氣管枝 七九六
急性甲狀腺炎、結核、黴毒及びエヒノコックス 八〇九
急性甲狀腺炎 八〇九
甲狀腺結核 八〇九
甲狀腺黴毒 八一〇
甲狀腺エヒノコックス 八一〇
急性及び慢性胸腺炎、胸腺增殖症、胸腺腫瘍 八一二
甲狀腺腫、咽頭及び食道 八一四
喉頭及び食道の繼續的疾患並びに甲狀腺疾患 八一五

喉頭氣管及び內分泌腺腫瘍　八一六
喉頭內甲狀腺腫及び氣管內甲狀腺腫　八一六
喉頭及び氣管のヒペルヲフローム轉位　八一七
氣管食道と上皮小體增殖症及び上皮小體腫瘍　八一八
頸動脈腺腫瘍　八一九
喉頭結核及び妊娠　八二三
高張症　八二五
骨體炎の聽器障礙　八三六
骨體炎性聾　八三七
喉頭氣管性侵入門　八四五
ケルニヒ氏症狀　八四六
鼓膜檢査法　八六一
輕度重聽　八六四
高度重聽　八六四
均衡機能檢査　八六七
鼓膜溢血　八八一
鼓室出血　八九五
鼓膜裂傷　八九六
氣壓變化に因る聽器障礙　九〇四
健康乳嘴突起像　九二四
急性中耳炎及び乳嘴突起炎のレ線像　九二五
後頭顏面撮影法　九三〇
後頭頤部撮影法　九三一
クニック氏法　九三三
健康喉頭のレントゲン像　九四三
各種喉頭疾患のレ線像　九四四
喉頭結核レ線像　九四六
喉頭黴毒のレ線像　九四八
喉頭癌のレ線像

L

ルウツエ氏ゾンデ　一
臨牀上症型　一四
ルウドウィヒ氏安魏那　一〇五
ロムブロゾ氏　一二五
淋巴症　一六六
ルツチン氏　一〇四
淋巴球浸潤　二七九
ランドリー氏麻痹　六五七
ランゲ氏ゾンチンカルブ氏法　九二三

M

慢性中耳炎　一二
慢性中耳炎の種類　一三
麻痹　一五
慢性中耳炎の骨疾患　二一
迷路性腦膜炎　三四
慢性耳漏　四二
マイエル氏　四九
モロ氏小窪　四九
慢性鼻咽腔炎(再發性)　七三、五五
マンドル氏液　七六
慢性鼻咽腔炎及び結核　七七
慢性再發性鼻咽腔炎の療法　八二
慢性炎　八六
マイエル(エー)氏　九五
慢性出血性腎臟炎　一〇六
ミクリッツ氏　一〇七
マールシック氏　一〇七
マルクス氏　一九六、二一六
モツアルト氏耳　二二
モレル氏耳　二八
迷鈴　一三〇
無耳症　一三〇
膜樣迷路　一四〇
マイエル(オー)氏　二三〇、二五六
マナッセ氏　二三八、二〇三、一九七
慢性進行性迷路重聽　一九九
マイエル(オー)氏　二〇七、二〇八
モンヂニ氏　二〇九
メビウス氏　二三七
メンデル氏律　二五二
迷路貧血症　二七五
慢性白血病　二八〇
耳のクロローム　二八八
メニエール氏症候群　二九〇
ムレキシード試驗　二四八
迷路外性聽力障礙　二五四
慢性尿毒症　二六四
慢性腎臟炎　二六四
毛樣體ノイローゼ　二八八
マリオット氏盲點　二八八
慢性鉛中毒　二三〇
麻疹　二四〇
無菌性毒性　二三〇、二五六
マラリヤ　二三八、二〇三、一九七
脈管運動性鼻炎　一九九
慢性傳染病篇　二〇七、二〇八
モナコフ氏交叉　二〇九
味覺生理及び味覺障碍　二三七
味覺末梢器關　二五二
末梢味神經纖維　二七五
味覺變常　二八〇
味覺脫失　二八八
味覺障礙　二九〇
慢性進行性延髓球麻痹症(ヂュサンヌ氏型)　二四八、二五四
味覺及び內分泌　二五四
味錯覺兼聽錯覺　二六四
耳の切創、割創及び咬傷　二六四
耳の咬創　二八八
耳の銃創　二九五
耳の異物　三〇三
ムコーズス中耳炎　三〇七
慢性中耳炎のレ線像　三〇九

N

腦膜炎樣症狀　四八三
腦膜症狀　四八五
腦膜症　四八七
內耳炎　五五六
腦膿瘍　六一九
內耳疾患　六二〇
乳兒期中耳炎　六二〇
乳兒期　六二二
乳兒鼻咽腔炎　六二三
乳兒の鼻咽解剖　七七、六九四、六五六
年長乳兒の症狀　六六二
熱及び不安狀態の療法　七九〇
熱及び經過　七九一
耳の切創、割創及び咬傷　八八二
耳の銃創　八九一
耳の異物　八九一
ムコーズス中耳炎　九〇八
慢性中耳炎のレ線像　九二〇
九二六

熱性再發 七四
ナドレツニー氏
内耳 九四
内因的素地 一四四
内因的條件 一五三
腦肥大症 一五九
内耳疾患 一七二
内耳退行變性 一九九
腦膜性内耳炎 二四四
乳嘴突起腔溢血 二四五
乳兒中耳化膿症と榮養障礙 二九三
尿酸鹽性アンギナ 三三三
尿酸鹽沈著 三五五
尿毒症と聽力障礙 三五六
尿毒性症候群 三六三
内耳出血 三六五
尿曲線 三六九
尿毒症性喘息 三七二
尿毒症に失語症 三七三
内直筋の切斷 三七五

乳頭炎 七四五
粘膜發疹 七四八
粘膜疾患 七五四
肉芽腫 七七二
乳嘴狀浸潤 七七三
軟骨膜炎並びに浮腫 七七八
軟骨膜膿瘍 七九二
内前枝 八二四
内膝狀體經路 八二八
難語症 八三四
軟口蓋 八三五
軟口蓋及び咽頭麻痹 八四六
妊娠神經炎 八四九
腦皮質核經路 八五一
腦神經疾患 八九五
腦膜及び腦竇疾患 八九六
内分泌病篇 八九七
粘液水腫 二
妊娠と中耳炎との關係
内分泌と頭痛

内分泌と耳硬化症 三八〇
妊娠及び産褥と耳硬化症 四五七
内分泌腺疾患と耳硬化症 四六一
腦下垂體及び鼻疾患 四九一
腦下垂體外科 五〇七
腦下垂體手術の適應 五一〇
腦下垂體 五一〇
内分泌及び喉頭痙攣 五四九
内耳に於ける齢的變化 五六五
人間老齢 六三八
年齢と重聽 六四〇
腦膜炎性聾 六五六
腦脊髓膜炎性中耳炎の經過 六五八
腦膜炎性内耳炎の病理 六七四
内溢血 七〇八
内耳出血 七一六
内耳裂傷 七二三

O

オレーフ油 七三三
歐氏管カタル及び慢性滲出性中耳 七三七

カタル
歐氏管カテーテル 三四
屋外療法 三六
歐氏管カタル及びその續發症 六五
オノジ氏 九七
オストマン氏 一〇八
歐氏管閉塞症 一三〇
歐氏管變形 一四三
音響透致部の畸型症 一六七
歐氏管經由 二四四
音響光覺症 二九六
歐氏管及中耳ヂフテリー性炎 三三七
音響廻轉 三七六
音中樞 四七四
横行連絡系 五五三
横筋不全麻痹 五六二
音聲及び言語 五六六
音聲 五八二
音聲及び生殖器 六三五
六三六
八二〇

歐氏管鼓室性侵入門 三四
温度性眼球震盪試驗 三六
横位撮影法 六五
九七

P

プライジング氏 一〇八
ポリープ 一三〇
パイフエル氏腺熱 一四三
プラスモヒン 一六七
ピラミドン 二四四
プライ氏 二九六
ペーテルゼン氏 三三七
ブルーサック氏腔 三七六
ポリツエル氏 四七四
ブリン代謝障礙 五五三
ブリン缺乏食 五六二
パッソー氏の一形式 五六六
ポリツエル氏統一的聽計 五八二
六三五

R

ライメル氏 六三六
ローゼンミユルレル氏窩 八二〇

離乳年長兒鼻咽腔炎 八四四
隣接淋巴腺疾患 八六八
淋巴組織肥大症 九三二
淋巴組織生理 六六
臨牀的病理 八五
類表皮腫 九一
類淋巴小球淋巴腫性浸潤 九三
聾話 一九二
絲色腫瘍 二三八
螺旋靭帶 八二
絲内障手術 二八三
一六四
一六五
一七〇
二〇六
三四七
三五四
八五八
八六七
二八九
三七五
三八二
三八四
三八四
四二八
四三四
四六四
一五
四六六
流行性耳下腺炎の特有なる併發耳疾患 六四六
流行性多發性腺炎 四六六

ロイマチス性アンギナ　四七一
瘰癧性鼻疾患　五〇三
荔枝狀肉芽　五一〇
瘻孔無しの瘻孔症　五一八
癤　五三三
癤性穿孔性鼻中隔潰瘍　五三七
螺旋神經節　五四八
菱形體　五五〇
連合膊　五五四
連合膊交叉　五五四
兩側後筋麻痹　五八〇
兩側側筋麻痹　五八一
兩側內筋麻痹　五八一
兩側廻歸神經麻痹　五八三
兩側性全廻歸神經麻痹　五八五
流行性腦炎　六八九
連續性間代性律動性痙攣　六九五
老人性重聽　八二六、七二五
老人弓　七二六
ロダプリン錠　七二七

S

小兒病篇　五五〇
診療要項　五五四
診察法及び其成績　五八〇
清潔法　五八一
再發性中耳炎　五八一
重症中耳炎　五八三
初期痙攣　五八五
刺戟症狀及び麻痹症狀　六八九
視神經障礙　六九五
ストレプトコックス、ムコーズス　二〇
耳性腦膿瘍　二四
耳性腦膜炎　二六
漿液性腦膜炎　二七
良性甲狀腺腫　三三
老齢期の疾患　三九
流行性腦脊髓膜炎　四一
流行性腦膜炎性中耳炎　五〇
立體撮影法　五二
レゼ氏斜位撮影法　五三
靜脈竇血栓　七九八
初生兒中耳炎　八三五
小兒期　八四三
顱門緊張　八四七
淺表性呼吸　九二四
遷延熱　九三三
全身症狀　五三
腎臟炎　五四
前鼻炎　五五
食慾缺乏症　五八
初生兒の症狀　五九
消化器障礙　九八、七二、六〇
滲出性ヂアテーゼ　六一
石灰水ヌトローゼ　六五
再發性咽頭炎療法　六五
腺樣咽頭炎　六八
遷延嘔吐　七二
腎　炎　七三
再發性潛伏型及び胃腸障礙　七五
臭鼻症　七六

小兒鼻出血　八三
耳鏡檢査　六
三クロール醋酸　八四
正中深部頸腺又は頸腺　八六
深部項腺疾患　八六
正中深部頸腺疾患　八六
シエーチマン氏
增殖症及び體質　九一
增殖症の類度　九四
前鼻檢査　九五
指頭檢査　一〇〇
手術適應症　一〇〇
手術結果及び危險　一〇一
出　血　一〇一
全身傳染病　一〇一
斜頸症　一〇一
セッヒ氏剪刀　一〇一
ソレスチン　一〇一
手術の危險　一〇七
栓塞除去法　一〇七
耳　翼　一一
耳翼の發生　一一
腮性耳翼隆起　一一
耳翼の大小　一一三
耳翼附著部　一一五
耳翼後內面　一一五
耳輪畸形　一一七
シユワルベ氏
スタール氏耳　一一〇
舟狀窩畸形　一一三、一一一
耳殼變形　一一三
耳珠及對耳珠畸形　一一三
耳朶畸形　一一四
耳翼輪廓　一一六
耳翼の不對稱構造　一一六
耳翼附屬症　一一八
小耳症　一一九
ジイメンス氏
腮性畸形　一一一
耳瘻孔症の遺傳性　一一一
耳小柱　一一四
正圓囊蝸牛殼變性型　一一四
スタイン氏
耳硬化症　一一五、一一四、一一九、二〇一
贅骨腫　一一五、二一七
サブロウ氏
神經病性素因　一一五
顳顬骨畸形　一一六
スピラ氏
臟器低格性　一一七
滲出性素因　一一一
先天性顏面神經麻痹　一一一
シユワルベ氏
眞性眞珠腫　一一三
消費症　一一五
シヤイベ氏型　一一五
職業性重聽　一一八
早期性動脈硬化症　一一九
早期性神經性重聽　一二一
神經迷路炎　一二一

ジーベンマン氏神經性內耳疾患 二二四
實驗的迷路水腫 二四五
子宮內性內耳炎 二四八
耳鳴 二四八
全身肥胖 二五五
心臟內膜炎 二五八
ゼモン氏副神經核 二六四
ジョンソン氏說 二七〇
心臟枝 二七〇
醋嗅覺 二七三
出血性滲出症 二七七
出血性濾液 二七八
出血性迷路炎 二七九
出血素因病 二八〇
紫斑病 二九〇
耳翼血點 二九一
聲帶の廣汎性出血 二九二
潛函業者 二六二
上氣道疾患と歐氏管機能障礙 二九八
二九九
上氣道粘膜キセローゼ 三〇三
上氣道と呼吸 三〇七
上顎部 三〇八
篩骨部 三〇八
上氣道機能障礙と肺疾患 三一二
上氣道疾患と肺疾患 三一四
縱隔竇疾患に因する上氣道變化 三一七
側氣管神經節 三一八
喘鳴性喉頭痙攣 三一九
消化器病篇 三二一
消化器及び聽器 三二一
耳痛 三二一
齒痛 三二一
耳神經節 三二二
齒性耳痛 三二二
齒性聽器反射症狀 三二五
耳性齒痛 三二六
齒性アンギナ 三二七
消化器病及び上氣道疾患 三二七
消化器病と鼻咽頭及び喉頭との關係 三二五
耳嚢結節 三三八
耳嚢潰瘍 三四八
腎臟病篇 三四九
腎臟疾患 三五七
腎臟病と中耳疾患 三五八
腎炎性中耳炎 三五九
腎臟疾患と非中耳炎性重聽 三六〇
自覺的耳鳴 三六一
子癇型 三六三
耳疾患に因る腎臟疾患の影響 三六六
腎炎性現象 三七一
腎炎性衄血 三七三
軸性視神經炎 三九四
視野の變化 三九五
視力の急激に惡くなること 三九三
刺戟界 四〇九
耳性齒痛 四一三
心臟ノイローゼ 四一七
秋期カタル 四一七
薔薇カタル 四一八

酸類及び鹽基 四三〇
重複音 四三二
水銀中毒 四三三
硝酸類 四三四
ストリヒニン中毒 四三四
ザリチュール酸中毒 四三五
猩紅熱 四四三
猩紅熱ヂフテリー 四四七、四四四
猩紅熱毒 四四六
續發性輪狀出血 四六〇
純中毒型 四六一
神經疾患 四六一
出血性喉頭炎 四六三
耳下腺炎傳染毒影響 四六六
神經性聾 四七六
粟粒結核 五〇九、四九一
潛伏性扁桃腺結核 四九六
增殖型 五〇八
聲脣潰瘍 五〇九
霜狀結節 五〇九
聲帶下浸潤 五一二
滲出性中耳炎 五一五
實質性角膜炎 五一七
前庭機能檢査 五一八
贅性丘疹 五二三
初生兒鼻カタル 五二三
上氣道癩 五二四
前驅期 五二六
浸潤期 五二七
聲帶下被膜成生 五四一
神經病篇 五四一
前庭根 五四七
正圓囊壺腹枝 五四八
前庭神經節 五四八
神經節細胞 五四九
髓線 五五一
前庭神經前根 五五二
前庭神經內根 五五二
前庭三角核 五五三
前庭神經下行枝核 五五三
小腦蓋核 五五三
前索原束 五五三
小腦球形核 五五四
小腦鋸齒狀核 五五四
赤核 五五七
上橄欖體 五五七
スカルパ氏神經節 五五七
前庭神經下行枝 五五八
視靜定器 五五八
前庭神經及び小腦 五五九
小腦側索經路 五六〇
小腦被蓋道 五六一
顳顬葉 五六一
顳顬橋間經路 五六五
聲帶運動の延髓中樞 五七三
上喉頭神經 五七六
左側後筋麻痺 五八〇
左側內筋麻痺 五八一
側筋不全麻痺 五八二
左側廻歸神經麻痺 五八四

全廻歸神經麻痺　五八四
ゼモン氏ローゼンバッハ氏律　五八六
舌の運動支配及び生病理　六〇六
舌痙攣　六一〇
臓器感覺　六一七
占居力　六一八
ゼムメリング氏黒質　六二六
隨伴的呼吸運動　六三〇
聲門吸氣性喘鳴　六三六
失語症　六三八
聲帶　六四〇
失調性構語障碍　六四三
脊髓疾患　六四三
脊髓痨　六七四、六四三
脊髓痨性聽神經萎縮　六四四
脊髓痨の喉頭變化　六四八
脊髓痨の定型麻痺　六四九
聲帶失調　六五〇
脊髓空洞症　六五三
聲帶麻痺　六五六
産褥神經炎　六五八
進行性筋萎縮性延髓球麻痺症　六五九
脊髓性進行性筋萎縮症（ジュセン、アラン氏型）　六六一
咀嚼筋萎縮　六六七
進行性延髓球麻痺　六六二
脊髓並びに延髓空洞症　六六四
神經核發育不全　六七五
錐體經路疾患　六七九
錐體外運動經路疾患　六八五
震顫麻痺症　六八七
進行性レンズ核變性症（ウイルソン氏病）　六八八
嗜眠性腦炎　六九〇
全嚥下筋の連續性律動性痙攣　六九六
脊髓震盪　七〇六
シュミット氏三型　七〇八
三叉神經　七〇八
三叉神經痛　七〇九
耳神經痛　七〇九
上眼窩神經痛　七一一
耳性膿毒症　七一〇
習慣性耵聹栓塞　七一七
生殖腺疾患　七三五
生殖器障礙と耳性反射　七三六
生殖器に對する鼻の影響　七四〇
性的部位疼痛　七四二
性的關係と耳硬化症　七四五
催春期と耳硬化症　七四五
性と耳硬化症　七五三
性交と耳硬化症　七五三
耳硬化症と血液新陳代謝變化　七五五
耳硬化症の內分泌學的療法　七六〇
肢端肥大症　七六九
耳鼻咽喉の局所傳染及び內分泌腺系統　七九一
膵臓並びに含水炭素代謝　七九六
生殖器及び喉頭　八一〇
早發性中耳炎　八四八
隨伴炎性內耳炎　八四九

シアルコウ氏遺法　八五六
耳科の法醫學的檢査　八五七
詐病　八六九
詐病被疑者　八七〇
前庭器檢査法　八七〇
耳損傷及び其の結果　八七三
純鼓室型中耳炎　八八〇
耳血腫　八九五
顳顬骨裂傷　八九七
自傷問題　九〇九
耳疾患及び精神障礙　九一三
耳鼻咽喉科領域のレントゲン應用　九一九
耳科レントゲン診斷學　九一九
撮影法　九二九、九三〇
矢狀位撮影法　九三一
ゾンチンカルプ氏乳嘴突起尖端撮影法　九三三
斜位撮影法　九三三
ステンウェルス氏法　九三三
軸位頭蓋撮影法　九三三
上顎竇炎　九三七
前額竇炎　九三七
篩骨蜂窩炎及び蝶蝶竇炎　九三九

T

體質　四四、一三
テンツェル氏體重及び消化　一五
轉地　一〇
トラウトマン氏鋭匙　一〇三
體質病篇　一一
對耳輪畸形　一一三
耵聹腺畸形症　一四八
多發性外發軟骨腫　一五九
短腦症　一七三
體質畸形患者　一八五
特發性萎縮　二〇六
トインビー氏　二三六
特發性遺傳性脆弱骨症　二三八
胎內性　二三九
體質性遺傳性變格性聾　二四〇
單性雜種交叉性遺傳　二五一
他覺的脈管音　二六三
點狀溢血　二九一
テザアル氏代謝器病篇　三一九
特發耳血腫　三四七
太陽カタル　三五〇
特種中毒疾患　四一九
痘瘡　四二九
痘瘡の膿疱　四五一
窒息性喉頭炎　四五三
特有性腺疾患　四五四
特有ならざる併發耳疾患　四六五
定型性失聲症　四六九
對稱性潰瘍　四八五
轉倒性音感覺　五〇九
多發性硬化症　六一七
タピア氏症候　六五一
淡蒼球　六七四
　　六八六

癲癇 七〇〇
トランスワェルト症候 七〇三
糖尿病 七二八
糖尿病の外耳疾患 七三〇
糖尿病の中耳疾患 七三〇
糖尿病の内耳疾患 七三三
代償性出血 七三七
特發眼球震盪檢査 八六八
轉位骨折 九〇一
チエブル氏法 九三三
竇内空氣含量の減少 九三五
竇内液體瀦溜 九三五
竇内粘膜の變化 九三五
竇壁の變化 九三五
竇腫瘍 九三五

U

ウッフェンオルデ氏 二五、一五
ウロトロピン 三一
ウェゼ子ル氏 五一
ウルバンチッチュ氏 七七
鬱血性浮腫 三三〇
鬱血性カタル（加答兒） 五五三
鬱血乳頭 六七一
厭熱 八七一
魚中毒 三
運動性腦脊髓神經障碍 六一、四四
運動性ノイロン退行變性 五一
運動性傳導經路 六九

W

ワゼリン 九六
ワンネル氏 一四三
ワイキセルバウム氏菌 一八二
ワイルド氏切開 二八七
ヴイルデルムート氏耳 三四七
ヴアリ氏 三四八
ワイデンフェルト氏 三五一
ウイットマーク氏 三五三、一七五、一七四
ワアゲンホイゼル氏 三六一
ワルザルバ氏檢査 三八七
ワルダイエル氏淋巴環 四六二
ワンサン氏アンギナ 六四〇
ウェストフアル氏エヂンゲル氏核 五五三
ワルレンベルグ氏 六七一
ウオダーク氏耳眼瞼反射檢査法 八七一

Z

頭蓋内合併症 三二
ツェルニー氏 六一、四四
舌吸引 五一
舌苔及び口臭 六九
ツアルニコ氏 九六
隨所成骨細胞 一四三
ツェーマッハ氏 一八二
頭蓋クロ、ーム 二八七
痛風 三四七
痛風の耳 三四八
痛風性耳炎 三五一
痛風性内耳疾患 三五三
ツッケルカンドル氏 三八七
頭蓋底腦膜炎 四六二
舌 六四〇
舌語不明 六四一
舌麻痺 六五五
舌唇喉頭麻痺 六六三、六五九
舌、口蓋帆、口蓋及び口唇筋麻痺 六六二
舌唇咽頭麻痺 六六三
舌下神經核 六六九
痛性知覺脱失 七〇五
ツワルデマーゲル氏説 八二九
通氣檢査法 八六二

昭和五年十二月二十七日 第一版印刷
昭和五年十二月三十日 第一版發行

正價金八圓

著者 細谷雄太 東京市本郷區龍岡町三十二番地
發行者 田中けい 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者 柴山則常 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所 合資會社 杏林舍 電話小石川(七七九番 四七二五番)

不許複製

耳鼻疾患

發行所 東京市本郷區龍岡町三十二
振替貯金口座東京四一八番
吐鳳堂書店
(電話小石川七六八七番)

大賣捌所

東京市本郷區春木町	南江堂書店
同　本郷區春木町二丁目	半田屋書店
同　本郷區切通坂町	株式會社金原商店
同　本郷區本富士町	克誠堂書店
同　本郷區本富士町	文光堂書店
同　本郷區本富士町	杏誠堂書店
同　本郷區新花町	鳳鳴堂書店
同　本郷區龍岡町	南山堂書店
同　本郷區龍岡町	文榮堂書店
同　本郷區切通坂町	宮澤書店
同　本郷區切通坂町	富倉書店
同　神田區表神保町	東京堂書店
同　芝區愛宕下町三丁目	明文館書店
同　日本橋區通三丁目	丸善株式會社
大阪市東區心齋橋筋博勞町	丸善株式會社支社
名古屋市中區榮町	丸善株式會社支社
名古屋市中區老松町	大竹商店
京都市上京區寺町通御池南	南江堂書店
京都市五條通麩屋町	丸善株式會社支社
京都市上京區丸太町	國井書店
大阪市南區道頓堀中座前	明文堂書店
岡山市下之町	渡邊泰山堂
岡山市東中山下	文江堂書店
熊本市安巳橋通町	芹川書店
長崎市引池町	安中集榮堂
別府市流川	金泉堂書店
金澤市片町	宇都宮書店
金澤市廣坂通	いろや書店
金澤市廣坂通	內田書店
仙臺市國分町	丸善株式會社支社
福岡市博多上西町	丸善株式會社支社
新潟市古町	萬松堂支店
千葉市市場	松田屋書房
千葉市市場	寶文堂商店

58
180

終